

山崎章郎 著

『ステージ4の緩和ケア医が実践する がんを悪化させない試み』



新潮選書

定価 1350 円 (税込み)

著者の山崎章郎（やまざきふみお）先生に初めてお目にかかったのは、私が厚生労働事務次官（2007年8月～2009年7月）の時、「人生85年ビジョン懇談会」の委員をされていた。当時の厚生労働省は、年金記録問題、C型肝炎訴訟、リーマンショック後の派遣切りなど様々な課題処理に追われていた。私が舛添厚生労働大臣に、これからの厚生労働行政の指針・ビジョンを作り、組織として明るい未来志向の政策方針を持つべきではないかと進言し、この懇談会の設置となった。山崎先生は在宅医療・在宅死の意義について発言され、各委員が感動してどよめきが起こったことを印象深く覚えている。

大分経ってから、私は埼玉医科大学の学生に特別講義をすることになり、山崎先生のケアタウン小平クリニックを訪ねて、医学部生に何を話したらよいのか教を乞うたことがある。先生の様々なご体験、実践を踏まえてのご意見、ご著書「病院で死ぬということ」等のお話、心に響くひとときであった。また、私が理事長を務めている医療科学研究所の機関誌『医療と社会』の2015年の特集号「人生の最期をどう生きるか、どう支えるか、どう迎えるか」に分担執筆していただいたこともある。

がんの治療医であり、在宅医療・緩和ケアの推進者である山崎先生ご自身が、がんになり患された。体調に異変を感じながらも、無理を押しして患者の方々への医療活動を優先し続けたことによって、ご自身のがんの発見が遅くなってしまったのではないかと思います。ステージ3の大腸がんであったが、幸い、その摘出手術には成功した。その後、再発予防を目的とした経口抗が

ん剤を服用し、その副作用で苦しみながら半年間、7クールを頑張る。しかしながら、終了時点でのCT検査で、両側の肺に多発転移（ステージ4）が見つかる。

本書は、在宅がん患者の緩和ケア医である山崎先生が、がんになり患してから治療や転移したがんとの共存療法の実践について、知識も経験も豊かな医師の視点で、多くの人々の参考に資するようにとまとめられたものである。

山崎先生は、いろいろな先生方の諸説を読まれて、「がんは大きくならなければ共存できる」という見解に納得されて、様々な取り組み方の中から取捨選択して、自分の納得できる標準的な「がん共存治療法」を煮詰めていく。

がん細胞が増殖のために必要としている主な栄養源はブドウ糖なので、糖質を制限すればがん細胞の増殖抑制は可能ではないか。ブドウ糖の供給が途絶えても皮下脂肪などから作り出されるケトン体がブドウ糖に代わるエネルギー源になる。そういうことから「糖質制限ケトン食」に着目し、また、EPAの効果にも着目して「EPAたっぷり糖質制限ケトン食」を自ら実践し始める。さらにビタミンDにも抗がん効果があることを知り、「ビタミンD強化EPAたっぷり糖質制限ケトン食」へと発展する。

その取組みの根底には、限られた時間を生きる末期がんの患者にとって最善とは何か、そのことを、医師の目線だけではなく、患者の目線や心を大切に解を導き出そうとする、先生の「こころ」がある。実践の成果は淡々と分かりやすく記されている。また、このような療法に取り組むがん患者を医療保険でもっと支えられるのではないかと問題提起もしている。

国民の2人に1人はがんになり患し、死因の4分の1はがんである。多くの方々はこの本を読んでいただいて、がんとの闘い、がんとの共存に、光を見つけていただきたいと思います。

山崎先生は、ステージ4が見つかったから3年経つとのことであるが、がんは大きくなっていないという。さらに新しい成果を積み上げていただいて、3年後に続編を、6年後には続々編を出していただきたいと思います。

(公益財団法人医療科学研究所理事長 江利川毅)